

## 書 評

黒羽根洋司 著

## 『病者の心を心として——庄内の医人たち——』

庄内が生んだ医の達人達を評伝した本書は、著者の黒羽根洋司氏が郷土の偉人達へ向ける熱いまなざしが伝わる好著である。ブックカバーには「貴賤によらず、親疎の差別もせず、生涯を病者の治療にささげた医師たちがいた。志を高く掲げ、私心を越えて世に尽くし、歴史に名を刻んだ医師たちがいた。彼らは等しく厳しさと優しさをあわせ持ち、理想の医療を求め体現した。庄内の医人たちへの共感が息づく20篇の評伝は、人々を奮い立たせてやまない。」とある。紹介者は医療教育機関で医学史、歯科医学史を講ずる身であるが、医療関係の学生に歴史を教育するというのは、単に科学史を教えればよいというものではない。医療人を志す学生は、やはり人に対する熱いまなざしが必要であるが、近年、経済的に恵まれる職業だからとか、何となくとか、大学1年生というより高校4年生のような状態の学生が散見されることは極めて残念である。著者の黒羽根氏は「1977年5月から1978年まで、国際協力事業団（JICA）の医療専門チームの一員としてガーナ共和国に派遣され」と記載されており、異文化を体験されていることも、本書の魅力を豊かなものにしていただろうと思われる。昔ほどではないが、海外に熱いまなざしを持っている学生も少数ながら存在している。黒羽根氏は「はじめに」において、「生き方を教わり、夢を与えられるのは、血わき肉おどる英雄伝や活劇の類からである。人間の苦悩や煩悩、モラルや美学を学ぶには、ハウツーである必要はなく、優れた恋愛小説で十分である。そして良き医師、社会人として生きる姿は優れた先人たちの評伝から学ぶはずである。」と著者の考え方が明確に述べられている。医療を教えるにあたり、単に科学を教えればよいというのではなく、物語性を学生に感じてもらうことは必要で、本書は歴史を教えるにあたり副読本として推奨される。

20篇の評伝の目次を紹介すると、「門山周智とゆかりの人々（上、下）」、「不屈の人 佐藤国蔵（上、下）」、「信念の人 石原捷士」,「詩魂の人 星川清躬」,「二人の蘭医 小関三英」,「二人の蘭医 山口行齊」,「小池正直と森鷗外（上、下）」,「正露丸と田中胃散」,「尾浦の耆婆 扁」,「杏林の名家たち一酒田編」,「杏林の名家たち一三川編」,「杏林の名家たち一鶴岡編」,「聖人 林信雄」,「侠医 酒井勝貫」,「大いなる自由人たち」,「一隅を照らす人びと」,「頼祭の終わり」である。特に紹介者が心ひかれる医師は石原捷士と太田玉庵である。

石原は明治34年庄内海岸一帯で熱性伝染病がはやった時、治療に携わるが感染してしまう。一命を取り留めた石原は、この伝染病は当時日本に無いとされていた発疹チフスであると自ら診断。発疹チフスは感染力が強いことから、石原は町当局に指示して伝染病予防法に準ずる消毒を行なわせた。このことが原因となり伝染病予防法で告発され、裁判所で二ヶ月の営業停の処分を受ける。この経過について著者の筆はリアルタイムにおこっているかのように冴えわたっている。結局石原は大正2年、自分が発疹チフスで死亡したと診断した患者の病理解剖を山形市済世館病院院長の西野忠次郎に依頼し、その所見が発疹チフスと一致したことにより始めて認知されるも、その後わずか3年しか石原は生きていない。現代においてもエビデンスを考える上において重要な出来事であり、著者は「歴史には時としてたった一つのことを成し遂げるために天がつかわしたとしか思えないような人物が登場する。」と評している。石原は立身出世、功名心のために発疹チフスの認知を求めたのではなく、あくまで病者のために立証しようとした経過がよく描かれており、この点で成功していると思う。

もう一人は著者がそそる人々と評する太田玉庵

で、酒田の名家に生を受けるも放蕩して出奔、長崎で医術を学び酒田で開業するも遊女を妻とし、最後は往診の帰り道に患家で振舞われた酒が原因で森の中で寝込み、そこを狼におそわれて死亡する話である。体制に縛り付けられた封建時代において、自分の意思を貫けた人生は魅力的である。このように硬軟とりまぜた評伝書は、医療を考え

る上でも参考となり、是非一度お手に取ることをお勧めする。

(西巻 明彦)

[メディア・パブリッシング, 〒998-0102 酒田市京田二丁目59-4-1, TEL. 0234(41)0022, 2010年, A5判, 200頁, 1,400円+税]

深瀬泰旦 著

## 『小児科学の史的変遷』

著者である深瀬泰旦氏は、日本医史学会の常任理事を長らく務められ、矢数医史学賞の受賞や大著『天然痘根絶史』(思文閣出版)をはじめとする多くの著書・論文を公にするなど、医史学界へ多大なる貢献をしてこられたので、ここで、あらためて氏の経歴について説明することは要しないであろう。

本書は、小児科医でもある深瀬氏が「長年抱いていた」と語る「小児科学の通史」についてまとめたものである。まさに氏の小児科学史研究の集大成といってよい著作である。

内容は、1983(昭和58)年から2007(平成19)年までに『川崎市小児科医会誌』に掲載された論攷を中心に、全五章で編成されている。第一章は「I 感染症の変遷」、第二章は「II 歴史的な小児科書をよむ」、第三章は「III 疾病概念の変遷」、第四章は「IV 小児病の診断と治療」、第五章は「V 小児科学の誕生と小児病院」である。

小児科学の歴史は、これまで断片的に検討されてはきたが、そのすべてを網羅し、体系的に学術書としてまとめられることはなかった。この課題に果敢に挑みつつまとめられた本書は、歴史的に価値ある学術書として評価されるべき力作である。もちろん、『小児科学の史的変遷』と冠しているが、一書で小児科学の全容について取り上げるに至らないことは著者も自覚的である。挑戦的でありながらもストイックな面をもって執筆された内容は、氏が臨床経験から課題として生起した

事項が選択されており、実証に至るプロセスも以上の課題意識に支えられながら一つひとつ丁寧に叙述・表現されている。

第一章「I 感染症の変遷」では、数ある感染症の中でも、「麻疹」、「仮性小児コレラ」、「脳膜炎」、「熱性けいれん」等が取り上げられている。

感染症は、公衆衛生対策として予防接種の普及・定着以降、生活習慣病へとその興味関心を奪われたようにみえた。しかしながら、近年のSARSや新型インフルエンザをはじめとする新興感染症・再興感染症の脅威は、深瀬氏が著した感染症との格闘史から、あらためて感染症の本質的課題と向き合う機会、そしてこうした事態に取り組むための教訓を与えてくれる時宜を得た内容となっている。

第二章「II 歴史的な小児科書をよむ」では、18世紀の小児科学の古典であるニスル・ローゼン・フォン・ローゼンシュタインの『小児科学の知識と治療』、マイケル・アンダーウッドの『小児疾病論』、そして、今日では自明のこととなった体温測定についての著作としてカール・ヴンデルリッヒの『疾病における固有の体温の様相』、診断学の歴史として名著とされているS・Jライザーの『診断術の歴史』を取り上げている。さらに、近代日本における最初の小児科医書である東京帝国大学初代小児科教授となった弘田長の『児科必携』を改訂版に至る内容の変化を追うことにより、我が国における診断や治療方法の受容過程